



令和5年度中学校武道授業(空手道)指導法研究事業

令和5年度中学校武道授業(空手道)指導法研究事業(主催=日本武道館・全日本空手道連盟・日本武道協議会、協力=富山大学教育学部附属特別支援学校、後援=スポーツ庁)は、1月24日、研究者8名、研究協力者3名、連盟事務局2名の計13名が出席して、富山大学教育学部附属特別支援学校にて実施された。

開講式では、高橋昇^{たかはしのぼる}公益財団法人全日本空手道連盟事務局長と沢登英徳^{さわとひでのり}公益財団法人日本武道館振興課長補佐による主催者挨拶の後、研究者を代表して、小山正辰^{こやまさし}研究者が挨拶を述べた。

開講式後、体育館に移動し、研究協議(1)「特別支援学校における空手道授業指導法について」として太田熊野^{おおたゆうや}研究協力者が指揮を執った授業の視察を行った。太田研究協力者は準備運動の後、武道における礼法の重要性を説き、続けて基本的な立ち方や突き方、受け方の指導を行った。

次に、砂川雄飛^{すなかわゆうひ}研究協力者が「雲手^{ウンスー}」の演武を生徒たちに見せ、最後は、曲に合わせて基本動作を反復する「パブリカラテ」を全員で行い、50分間の授業が終了した。生徒たちからは大きな声で気合を発し、生徒間で教え合うなど積極的に空手道の授業に取り組んでいる様子が見受けられた。

視察後の感想や反省として、研究者からは、「教師が生徒への問いかけの頻度を多くすることで、生徒同士の学び合いの機会を増やし主体性を持ってもらえる授業を展開することができるのでは」と今後の課題として意見が挙げられた。

研究協議(2)では、太田研究協力者と松原光^{まつばらひかる}研究協力者が、令和5年全日本空手道連盟が富山県、岩手県、山形県で行われた学校訪問プロジェクトについて報告を行った。

研究協議(3)では、特別支援学校における空手道授業の展開について2班に分かれて、「生徒に達成感を得てもらったための授業指導上の工夫」、「知識を身につけた後の主体的な学びをどのように指導していくか」を課題にグループ協議を行った。

研究者からは、「生徒それぞれのレベルの違いを把握したうえで教材の工夫や指導の目標をどこに設定するかが重要である。小さな達成感やステップを授業の中で作っていくことが必要ではないか」、「教員は課題の出し方や問いかけの方法を意識しなければならない」といった意見が挙げられた。

閉講式では、小山研究者代表の講評に続き、野崎美保富山大学教育学部附属特別支援学校副校長から挨拶があり、日下修次^{くさかしゅうじ}全日本空手道連盟顧問、沢登日本武道館振興課長補佐が主催者挨拶を述べ、予定していた内容をすべて終え、閉会となった。



赤色と青色の手袋を使った基本動作の練習